



Title	el him,theos,Zeus,God,神、仏、尊(命)の語源
Author(s)	新谷, 光二
Citation	基督教学, 36, 25-26
Issue Date	2001-06-29
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/46641">http://hdl.handle.net/2115/46641</a>
Type	article
File Information	36_25-26.pdf



[Instructions for use](#)

# ‘*elohim, theos, Zeus, God,* 神、仏、尊(命)の語源

新谷 光 二

世界の言語の系統は未だ解明されていない。一つの仮説としてはすべての言語をノストラ大語族に帰せしめ、これをユーラシア大語族、ドラヴィダ語族、カルトゥヴェリ語族、アフロ・アジア語族に分ける考え方がある。ユーラシア大語族にはインドヨーロッパ語族を始めウラル語族、アルタイ語族が含まれるとされている。この考え方の当否は別にして、日本語やヒブル語はどの語族に属するのかの大問題には定説とされるものがない。従って、正統的な比較言語学によつては語源は明らかにできないとされてきた。

しかし、演者は少くとも日本語はインドヨーロッパ語族に属することをこの四半世紀主張してきた。その論証

の決め手はインドヨーロッパ語根の音素  $\text{r} / \text{r}'$  が日本語の  $\text{r} / \text{r}'$  となる音韻対応法則（いわば、新谷の法則）を見出したことである。その論証は印欧語根の、\**leubh-o* とその母音交替の語型 \**leubh-*, \**leubh-o* の三語根他によつてなされた。これらの語根の意味内容は順に、可愛らしい、許可（原義は要求）、愛である。これらに対応する日本語語彙は、くはし、乞ひ、恋ひ（媚び）であつて、この三語彙は音韻論的には、[*keubh-si*], [*koubh-*], [*kubh-*, *kubo-*] が原型である。万葉集の音韻に関する石塚龍麿、橋本進吉らの研究によれば日本語の五十音図に基づくい、え、おの段の音韻に二種類があることが発見された。即ち、乞ひは [kōhi:] であるが恋ひは [kōhi:] である。この違いは前述の発音記号から明らかになる。更に全く独立の研究であるが松本克巳の日本語の内的再構によれば乞ふは  $\text{r}$  幹であり、恋ふは  $\text{r}'$  幹であるとされるが、この説とも一致する。また、大野晋によれば乞ふの四段活用は語幹が閉音節であり、恋ふの下二段活用はそれが開音節であつたとされるが、この説をも明解に説明できる。即ち印欧語根に基づいて日本語語彙の内部

音韻構造が明らかにされたわけで、これは印欧比較言語学の揺ぎない成果である。

この成果に基づき日本語彙、神は印欧語根\**tan-*に遡及でき、この語根の意味内容即ち語源は死者の霊とすることができる。日本語の民間語源としては上に居ますから神であるとするものがある。しかしこの語彙も万葉集では、神は【*kami*】、上は【*kami*】であって音韻に差がある。大野晋はこの音韻の差から神と上の同源を否定した。これに対して、渡部昇一は上に居ますから神は自明で音韻の差はむしろ同源の証査とし、国語学にも印欧比較言語学の方法論の必要性を主張した。この両論に対して演者は語源を示し得ない議論は空論であり、語源にせよ上に居ますから神とするの考えは国粹主義の暴論と断じる。演者は上は印欧語根\**ken-*に遡及できてその語根の意味内容即ち語源は穹窿であり、天空の意味であることだけを述べておく。

次に、*God*の語源は印欧語根の\**ghau-*であって呼び求めるという語源を措定できる。即ち、*God*は呼び出されたもの\**ghau-to-*である。これは宗教的には祈りと関係す

る語彙で、日本語語彙の言や事と同源である。この万葉の音韻は【*ko-to*】であるから前述の通り説明され、矛盾はない。美称を付したみことは尊(命)であり、神ではなく尊(命)が*God*と同源であることが分る。

*theos*は印欧語根\**deiv-*に遡及しこの意味内容は一般的宗教概念をいった。これから、\**dhese-*を経て*theos*即ち神となった。同源の英語は*funeral, festival*などであり、これは日本語語彙では死、節(セツ、セチ)と同源と考えられる。

*Zeus (Deus)*の語源は印欧語根の\**deiw-*であり、輝く、天空から神の概念を生じた。これはパンテオンの主神であり、キリスト教の唯一神にはふさわしくないが、ラテン系ではこの語彙が用いられた。

研究発表ではエロヒームをめぐる、又、ほとけの語彙についても論じたが紙数が尽きた。ヒブル語については未だ日本語に於けるような証査があげられておらず語源も前述の如く不確かである。